

継続検討品目群（目的物）

提案品目名、品目概要は提案者からの提出資料から抜粋したものです。

平成26年度版

統合品目名	提案品目名	提案品目の概要	比較対象品目名	検討結果	
				分類	理由等
遮熱性舗装	パーフェクトクール (特に遮熱排水性舗装を クールパービースと 称す)	パーフェクトクールは、アスファルト舗装の表面に遮熱樹脂「パーフェクトクールコート」をコーティングした遮熱性舗装で、路面温度の上昇抑制機能を付与したものの。特にヒートアイランド現象が顕著な都市部において、夏季の電力消費量低減やこれに伴うCO2排出量削減の可能性がある。また、クールパービースは、樹脂コーティングするアスファルト舗装の対象を排水性舗装に限定した遮熱排水性舗装で、排水性舗装の機能(騒音低減、排水機能など)に加え、路面温度上昇抑制機能を付与したものの。パーフェクトクールコートの代表的な色には、濃灰色タイプや灰色タイプ等がある。保水性舗装とは異なり、路面温度上昇抑制機能発揮のための、水分補給などの管理が不要。平成14年度～平成24年度までの施工実績は、409件、約32万m ² 。	排水性舗装	継続検討EQC	○本品目については、統合品目「遮熱性舗装」に該当するものと判断して検討させていただきました。 ○検討の結果、以下の理由により継続的に検討させていただくこととしました。 ①期待される環境負荷低減効果が十分か、継続的な検討が必要と考えられる。 ・コーティング材が混入されるため、アスファルト混合物として繰り返しリサイクルが可能か確認が必要 ②JIS・JAS等の公的基準に適合していないなど、品質確保について不確実性が残ると考えられる。 ③比較対象品と比べてコストが高いと考えられる。
保水性舗装	クールペープ	アスファルト舗装は熱を蓄熱しやすく、夏季の日中には気温30～40℃において60℃にも達することがある。このため、アスファルト舗装が占める面積が大きい都市部では、都市全体の気温を高くするいわゆるヒートアイランド現象の一因になっているとの指摘もある。提案の舗装は、舗装内部の空隙に水分を保持できる吸水性ポリマーと、吸水性の高い保水材が注入されており、保持した水分が蒸発することによって、舗装の蓄熱量を抑えることができ、周辺熱収支量の低減(体感気温差で約2℃)に寄与できるものと言える。	排水性舗装	継続検討EQC	○本品目については、統合品目「保水性舗装」に該当するものと判断して検討させていただきました。 ○検討の結果、以下の理由により継続的に検討させていただくこととしました。 ①期待される環境負荷低減効果が十分か、継続的な検討が必要と考えられる。 ・路面温度抑制性能について、長期耐久性の確認が必要 ②JIS・JAS等の公的基準に適合していないなど、品質確保について不確実性が残ると考えられる。 ・試行的な取り組みという位置づけであり、実績等に基づく技術基準などが未整備 ③比較対象品と比べてコストが高いと考えられる。
	クールポリシール	クールポリシールは、高空隙のベースアスファルト混合物に、保水効果の高い特殊セメントミルク(クールグラウト)を充填した保水性舗装です。水が蒸発する際の気化熱により、効果的に路面温度の上昇を抑制します。特に都市部におけるヒートアイランド現象の緩和に寄与できると考えられます。平成14年度～平成24年度までの施工実績は、78,709m ² 。		継続検討EQC	○本品目については、統合品目「保水性舗装」に該当するものと判断して検討させていただきました。 ○検討の結果、以下の理由により継続的に検討させていただくこととしました。 ①期待される環境負荷低減効果が十分か、継続的な検討が必要と考えられる。 ・路面温度抑制性能について、長期耐久性の確認が必要 ②JIS・JAS等の公的基準に適合していないなど、品質確保について不確実性が残ると考えられる。 ・試行的な取り組みという位置づけであり、実績等に基づく技術基準などが未整備 ③比較対象品と比べてコストが高いと考えられる。
	ミズホ[ai]	高保水性コンクリート舗装材 ミズホ[ai]は、降雨によって浸透した水分を独自の多孔質構造内に蓄え、気温の上昇に伴い表面から水分を蒸散させて気化熱冷却効果で温度上昇を抑制する。また、雨や散水がなくても毛細管現象で路盤から水分を吸い上げ蒸散した水分を補うため、持続的に温度を低減する。真夏であっても降雨だけで、約5日間持続して温度を低減させる効果がある。		継続検討EQC	○本品目については、統合品目「保水性舗装」に該当するものと判断して検討させていただきました。 ○検討の結果、以下の理由により継続的に検討させていただくこととしました。 ①期待される環境負荷低減効果が十分か、継続的な検討が必要と考えられる。 ・路面温度抑制性能について、長期耐久性の確認が必要 ②JIS・JAS等の公的基準に適合していないなど、品質確保について不確実性が残ると考えられる。 ・試行的な取り組みという位置づけであり、実績等に基づく技術基準などが未整備 ③比較対象品と比べてコストが高いと考えられる。